



中山 太洋 (なかやま たいよう) 大和田小 4年生

作品名: ネバー・ギブアップ

図 書: ぼくらの最強イレブン

ぼくは「ぼくらシリーズ 14 ぼくらの『最強』イレブン」という本を読みました。この本を選んだ理由は、ぼくの大好きなサッカーの物語だからです。

この本は、菊地英治が主人公の物語です。英治は、情熱的で行動力のある高校3年生です。英治は、サッカー部に入部していましたが、サッカー部のキープレイヤーである木俣研一のイタリアサッカー留学と同時にサッカー部を引退します。その後、サッカー部の部員がへり、1年後に研一がイタリアから帰ってくる頃には、わずか6人となってしまいます。英治は、研一がイタリアから帰ってくることを知り、研一が再びN高校サッカー部でプレーできるように、親友の相原徹と共に、部員集めを開始します。ようやく試合ができる部員がそろいますが、不良グループとのケンカやサッカー部のお金がぬすまれるなどのいろいろな問題がおこります。そんな中、英治はサッカー部がサッカーをつづけられるように問題を解決していき、部員どうしのきずなをふかめていきます。どんなに大きな問題があろうと、部員全員があきらめずに立ち向かうことで、サッカー部が少しずつ成長していく物語です。

ぼくがこの本を読んで、一番心に残ったのは、「目標が高ければ失敗するかもしれない。しかし、失敗を怖れてはならない。失敗したらまたやり直せばいい。何度でも、何度でも挑戦するのだ。ネバー・ギブアップ」という先生の言葉です。特に、「ネバー・ギブアップ」という言葉が心にひびきました。「ネバー・ギブアップ」とは、決してあきらめないという意味です。ぼくはこの部分を読んで、あきらめないことは大切なんだなと思いました。

なぜなら、ぼくのサッカーチームでも、仲間がけがをして、8人で戦うところを7人で戦って負けたというくやしい思いをしたからです。試合が終わった後、ぼくたちのチームのヘッドコーチが、「試合には負けたけど、さいごまであきらめずにプレーした君たちは、すばらしかった。」と言ってくれたことを、この本を読んで思い出しました。

ぼくはこの本から、どんなに苦しい状況でも、あきらめなければ成功につながることを学びました。これから、サッカーの試合でどんなに負けそうでも、さいごまであきらめずに全力でプレーしたいと思います。